

トピックス

第12回国際ダニ学会議

(独)森林総合研究所 岡部貴美子

2006年8月21日～26日に、オランダ・アムステルダム大学において第12回国際ダニ学会議が開催されました。参加登録者はおよそ400人に及び、35か国を超える国々からの口頭・ポスター発表がありました。

国際ダニ学会議は1963年にアメリカ合衆国コロラド州フォートコリンズで第1回目が開催されて以来、ほぼ4年に1回、世界各地で開催されています。アジアでは1986年にインドで開催されたのみですが、主にヨーロッパの国々がホスト国として世界のダニ学者を迎えてきました。日本のダニ学者も第1回目から参加しており、なじみの深い学会といえます。昆虫のように同好の士が大勢集まりやすい学会に比べると、「ダニだけで学会大会が開けるの?」という質問を受けることが多いマイナーなイメージのある会議ですが、400人ものダニ学者が一堂に会すれば講演内容も多岐にわたり、その多様性の高さにはきっと初参加の方は驚くことと思います。

さて、会議は8月21日朝から参加登録が行われ、2箇所の会場の内、教会であるルーサーカーク会場でオープニングセレモニーが行われました(図-1)。会場の大きな垂れ幕には、アムステルダム大学のロゴマーク、アルファベットのUの中央に縦にXが3個連なる代わりに、3頭のダニが配されたウイットに富んだ大会ロゴがプリントされていました。オープニングでは大変カジュアルで、ユーモアあふれるサベリス教授の挨拶に、参加者一同時差ぼけも忘れ、会場に和やかなリラックスムードが漂いました。引き続き、オハイオ州立大学のクロンペ恩博士の基調講演では、マダニおよびカタダニ類における寄生性の進化がDNA解析結果をもとに議論され、両グループは極めて近縁であるとの結果が示されました。博士は元々オランダ出身で、大学院時代にアメリカに渡りミシガン大学で学位を取得しました。そのような意味でも、開催者側にとっても意義深い基調講演だったこと思います。

もう一つの会場、オーデマンズポートは大学のカフェテリアの隣にあり、いくつかの大きな教室が会場として供されました。この建物1階入り口では休憩の度に茶菓

が振る舞われ、大勢の研究者が議論を交わしたり、共同研究の相談をしたり、大変にぎわっていました(図-2)。セッションおよび講演は、天敵・個体群動態・侵入生物・農業ダニ学・土壤ダニ・分類・形態・系統分類・化学生態・進化など多岐にわたりました。の中では、特に系統分類や進化、共進化や共生に関するセッションが多く見られ、前回のテーマ生物多様性とは一線を画したように思います。既によく知られていることですが、ダニ学研究者の間でもDNAシークエンスはごく一般的に使われる手法となっており、単なる近縁種との系統関係の解析だけではなく、生態的あるいは他生物との共生関係の進化にまで言及する発表が多く見られました。また、国際ダニ学会議でも侵入生物のセッションが開かれ

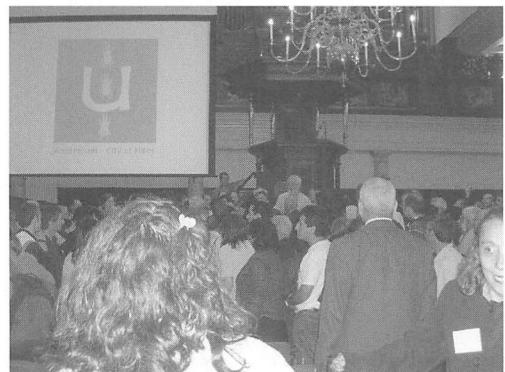


図-1 ルーサーカーク会場、記念撮影に集まる参加者



図-2 オーデマンズポート会場、休憩時に談笑する参加者

XII International Congress of Acarology. By Kimiko OKABE

(キーワード:オランダ、アムステルダム、農業ダニ学、寄生性ダニ、系統分類)

たことも、新しさを感じました。しかし、このセッションで科学的データを示せる研究者はまだ少なく、発展途上の分野であると感じました。検疫システムの構築など世界に共通する重要な案件であるこのようなテーマこそ、国際会議の場でもっと議論すべきであると思いました。参加国は当然ながらヨーロッパ諸国が多く、ヨーロッパダニ学会のみならず国際ダニ学会議も運営し、活発な議論を行うことに感銘を受けました。また、アメリカ大陸での大会では南米の研究者が熱帯ダニ学のセッションで活躍しますが、ヨーロッパではアフリカや中近東の研究者がこの方面をカバーすることにあらためて気づきました。アジアでも東南アジアのダニ学がさらに発展することを期待したいと思います。

日本からは20名弱の研究者が参加し、いずれかのセッションで講演を行いました。特に農業分野からの参加者が多いのは例年通り、また他の国と同様でした。今回学生およびポスドクの方々が日本人研究者の約半分を占めたことは、今後のダニ学の発展、国際化のために大いに期待の持てるこことだったと思います。各自積極的に、常連の参加者の紹介で、あるいは直接に各国の研究者と交流している光景を何度も目にしました。それぞれの方々がきっと大きな成果を持って帰国されたことだと思います。

本大会はエクスカーションがなく、連日朝9時から夜7時までセッションが組まれるという、なかなかハードなものでした。このようなスケジュールの中では、二つの会場間の移動が、ちょっとした市内観光になりました。ご存じのようにアムステルダムは運河の町ですが、初日夕刻の大会会場からレセプション会場への移動は、ボートによる運河巡り（徒歩と比べて相当の遠回り！）でした（図-3）。幸運にもサベリス教授のすぐ近くに席を取った方々は、アムステルダムの歴史なども聞くことができたそうです。私はイスラエル、コスタリカ、ロシア出身の研究者達と運河観光を楽しみましたが、うち一人がアムステルダム大に滞在した経験があり、景色の解説をしてくれました。また会場近くの運河沿いには、花の屋台がずらりと建ち並び、壮観でした（図-4）。さすがに園芸の国、オランダと思いましたが、よくよく見ると多くの品種が既に日本に輸入されていることに気づきました。日本人研究者の中には、この機会にコパートを訪問した方もいたそうです。運河の上では優雅でしたが、ひとたび大通りに出ると、人、車、バイク、路面電車

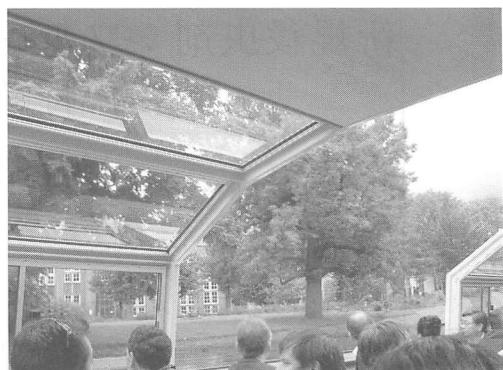


図-3 運河巡りをしながら懇親会会場へ移動



図-4 運河沿いの園芸植物の屋台

が行き交い、かなりエキサイティングでした。滞在中一度も事故を目撃しなかったのは不思議なくらいです（主に会場にこもって講演を聴いていたためですが）。

アムステルダムは小さく狭くごみごみして、人口密度が高く、物価も高く、まるで日本の大都市のようでした。歴史ある建物が、ほとんどなんだか日本で見たことがある！と思えたのは、鎖国時代も交流のあった日本とオランダの長年の友好関係のおかげでしょう。ワーゲン・ゲン大学、アムステルダム大学、コパートなど日本人研究者になじみの機関も多く、外国でありながら、何となくよく知っていたような感覚を覚えました。有名なチーズは、あまりなじみ深くないかもしれません。

次期開催国はブラジルに決定しました。日本からは少々距離がありますが、知識と出会いと発見を求めて、多くの研究者が参加されることを期待したいと思います。